

石川允さんを訪ねて

息子から見た都市計画家・石川栄耀氏の姿とは。

近代都市計画の先駆者、石川栄耀氏（以下、栄耀氏）をきっかけに、東京・渋谷などでまちづくりに取り組む人たちの輪が広がり、『えいよう舎』が始まりました。発足から2年半余が経ち、この間、栄耀氏に関する書籍が発刊されるなどその理念や実績に改めて注目が集まっています。そんな栄耀氏の人物像に少しでも触れたいと考え2010年11月14日、栄耀氏のご長男、石川允さん（以下、允氏）と奥様の富美子さんに、濱出憲治氏、渡邊耕氏、牧野洋久の3人で、お話を伺いしてきました。



「親父おやじもわしも、本当に

都市計画が好きだった」

詩的センスを持つ技師

「ああいう人は、どういう風につかんでよいか分からない。ただね、おやじもわしも、本当に都市計画が好きだった。普段は柔らかいけど、仕事になるとおっかない。そんな人でした」。允氏は、栄耀氏をこう評する。栄耀氏は、都市計画法公布の翌年、1920（大正9年）に内務省（当時）の都市計画技師になった。「おやじたちは道路網をつくっていた。あのころはみんな素人でしたから、自分で勉強したんですよ。日本で初めてのことだから、面白かったろうね」（允氏）。

允氏も、建設省（当時）に入り都市政策などに従事した。栄耀氏が東京都に移った後だったが、父を知る人の部下になることもあったそうだ。允氏によると「（栄耀氏は）上司に面白いがられていたね。非常に発想が良く、それでいて役人くさくない。平気で何でもやっただけでしょう」。ただ、「頭の回転が速すぎて周りは困った。勉強なら良いけど、仕事でも先走っちゃうんだよ。後になって『しまった！』ってこともあった（笑）」（允氏）とも。

栄耀氏は、専門書から児童読本まで、都市計画に関する多くの論考を残している。允氏は「会議の最中も書いていた。原稿を見ると、それがまた良いんだよ。まるで詩だ。あの真似はできない」と振り返る。栄耀氏は、努力家でもあった。東京帝国大学（東京大学）の受験時は身体が悪く人力車で試験に行ったそうだ。允氏は「一生懸命勉強したみたいですよ。東大で成績が1番じゃなくても憤慨していた。秀才だったんでしょね」と話す。教育への思いもあった。「早稲田大学教授になり、『先生は良いものだ』と喜んでた。本当は、東大教授になりたかったんでしょね」（允氏）。

歌舞伎町計画 『書いておけ』

栄耀氏は戦後、東京の戦災復興計画を手掛ける。特に重視していたのは、新宿や渋谷、池袋など中心的な商業地の再生だった。財政難から計画縮小を余儀なくされた面もあったが、土地区画整理事業による基盤整備は、東京の発展を大きく後押しすることになる。その中の一つ、新宿・歌舞伎町は、町の命名者として今も語り継がれている。「栄耀先生は、直接、指導をしてくれていたのですか？」（濱出氏）という問い掛けから、話題は当時の裏話に。こうした功績の裏側に、允氏との共同作業があったというのだ。

允氏は「（栄耀氏は）大学くらいから指導してくれたね。指導なら良いんだ。要するに、仕事をさせるんだ、内緒でね。自分の内職みたいな仕事を全部、わしにやらせていた。いかげんな人だからね（笑）」と懐かしそうに振り返る。歌舞伎町の街路計画も、「『おう、書いておけ』ってね。歌舞伎町の初めの絵は、みんなわしの絵なんだよ」（允氏）。これには一同びっくり。渡邊氏が「（中央の広場に至る）ジグザグのアプローチはどのような意図だったんですか」と聞くと、允氏は「あれはおやじに教わった。真っ正面に盛り場に行くのと、その盛り場は栄えないというおやじの考えがあった」と応えてくれた。浅草や池袋も、允氏が手掛けたそうだと。栄耀氏からの仕事はいつも突然だった。「『これを明日の朝までにやっておけ』とね。その後、『できたか』と来るんだよ。『まだだ。これから書く』なんて言うのと、怒る怒る（笑）。自分は明日に持って行くって約束しているからね」（允氏）。意見が対立することもあったという。「おやじの流儀と俺の流儀は、必ずしも同じじゃない。おやじは即断で書き始めるんだ。いい

かげんなもんだよ（笑）。わしは、わりかしじいっと眺めて、それから書き始める。お互い言うことを聞かない方だから、しょっちゅう喧嘩だ。それでいて一番仲が良かった」と允氏。「（指示は）『こういうのを書いてくれ』こっちは苦労してやるわけよ。（栄耀氏の言った内容を）土台にして自分で勉強する。それは、役に立ったね。だから、普通の人が都市計画の絵を描けないところに、自分は一人前の絵を描いていた」（允氏）。こうしたやり方は、栄耀氏なりの鍛え方だったのかもしれない。允氏は、「教育は難しいね。自分で発見させなきゃ駄目だよ。ポイントだけを言っただけ、あとは教えちゃいけない。教えたら、その人以上に出られないし、同じものができたら面白くないよ。教わるのでなく、自分で探す。そうすると、良いものができる」と指摘する。栄耀氏にとっても、允氏との秘密の仕事は楽しかったのだろう。「わしには言わなかったけど、周りには得意になっていたみたいだ



演出 憲治（はまで・けんじ）氏
都内地方自治体でまちづくり行政などに携わる。栄耀氏の子供向け読本『私達の都市計画の話』に感銘を受ける。60歳

よ。「これは息子がやったってね」。本当に勝手なものだよ（笑）。おやじは、『仕事は継がせられない』って言っていた。でも、やっぱり継がせたかったんでしょ（允氏）。

大事だから鍛える

「子どもは非常に大事にしましたよ。だけど、育てる時には本当に厳しかった。怒るときには徹底的に怒る」。それが允氏の話す父親像だ。「写真からは想像つかない。優しいお父さんかと思っていました」と言う濱出氏に対し、允氏は、「私は、よく外にほっぽり出されていた。夜中に泣いていると、隣の奥さんが飛んできて『石川さん、無茶なことしなさんな』ってね（笑）。便所に閉じこめたり、そういうことを自由自在にやっていたね。天真爛漫でしたよ。おかげさまで、怒られるのだけは慣れましたね（笑）。大事だから鍛える。萎縮してしまおうと困るけど、反発するくらいの子なら、怒った方が良い」と話す。

允氏は、特攻基地で将校をしていた際に終戦を迎えた。東京に戻ってくると目白の家は

牧野 洋久（まきの・ひろひさ）
大学の土木工学科（都市計画研究室）を卒業後、大手建設会社などを経て、現在は業界紙記者・ライター。35歳





石川 允 (いしかわ・まこと) 氏
石川栄耀氏のご長男。建設省・国土庁(現国土交通省)で、都市計画・建築行政などに携わる。国土庁審議官、長岡技術科学大学副学長などを歴任。現在は同大名誉教授。87歳

焼失していたという。「帰ってきた時、(栄耀氏が)生きていたか分かりませんでした。(勤務先の)東京都に聞いたら、昔の市立一中(第一東京市立中学校、現・千代田区立九段高校)にある分室にいましたよ。行ったら、『おお、帰ってきたなあー』と大騒ぎでした。私は司令部にいて、死ぬとは思わなかったけど、おやじは諦めていたみたいです」。允氏は、当時からこう思い返す。

栄耀氏は、幼少期に叔父夫婦の養子となっている。「(養父の経済力で)東大に行けたことを、非常に良しとしていましたね。『俺が今あるのは、おやじとおふくろ(養父母)のおかげだ』と、いつも大事にしていました」と允氏。「(栄耀氏を描いた本の中で)養子に行く時に泣いていたと書いてあるけど、嘘もいとこころだ(笑)。本人は、『養子だ、養子だ』と得意になってた」とも。情熱あふれる一方で、現実主義的な面がある栄耀氏らしいエピソード

ソードと言える。栄耀氏は、「死んだ顔を見るのは嫌いだっただ(允氏)。養父の石川銀次郎氏が亡くなる際、允氏に「死人の顔は見るな。それは決して良い印象じゃない。相手にとつても良くないだろう」と話した。「(栄耀氏は)『何事も良いことで終わらせる』と盛んに言っていた。そういう面では、哲学の人なんだろうね(允氏)」。

栄耀氏は晩年、親族に囲まれて暮らした。允氏の奥様・富美子さんによると、毎夜9時になると栄耀氏を囲むように皆が集まっていたそう。演出氏が「訓辞をするのですか?」と聞くと、「話もなにも、自分が言いたいことを話すんだ(笑)」と允氏。富美子さんは、「早く亡くなるからなのかなあって、後で思いました。だって、毎日でしたからね(笑)」と話す。允氏は「みんな、よく集まったね。やっぱり、それだけ子どもをかわいがっていた、懐いていたんだろうね」と振り返る。

~~ 栄耀氏・允氏と新宿歌舞伎町 ~~



現在の歌舞伎町広場
奥は閉館した新宿コマ劇場

新宿・歌舞伎町は、戦争で焼け野原となった後、土地区画整理事業により基盤が整備され、日本を代表する繁華街へと成長した。当時、地元から相談を受けた栄耀氏は、中心に広場を設け芸能施設を集積させる案を提示。その核となる施設が歌舞伎劇場だったことから「歌舞伎町」と命名したが、建築資材統制により歌舞伎劇場は実現しなかった。

碁盤状ではなく、幅員を変えながら折り曲がって広場に至る街路形成が特徴的だ。「盛り場は真っ正面に見えない方が良い」という栄耀氏の理念を允氏がくみ取り、こうした形状になったという。

歌舞伎劇場の予定地は、その後、新宿コマ劇場になるが、2008(平成20)年に閉館。新たなまちづくりが計画されている。

渡邊 耕 (わたなべ・こう) 氏
大手建設会社で開発プロジェクトなどを手がけてきた建築技術者。石川栄耀氏は祖父。允氏は伯父にあたる。49歳



好奇心旺盛なB型

栄耀氏は、多彩な趣味人でもあった。「ガウンを着て帽子をかぶり、名古屋で絵を描いて歩いていました。ギターもやっています。おやじは、名古屋では非常に大事にされています。有名人でした。だから先生はみな一流で、何でもやる。だけど、上手くなかったね(笑)」。

允氏は、愛情たつぷりの笑みを浮かべながら、往時に思いを寄せる。「というのね。本業は一生懸命やるけれど、本命以外は遊び。そういうのはつきりした性格だった」(允氏)。栄耀氏の好物は、鮭の塩引きと蕎麦。お酒は嫌いで、ほとんど飲めなかったそうだ。

さらに、栄耀氏が学生時代から好きだったのが落語。もっぱら聞く方だったそうだが、



「寄席に行つて帰つてくると、その日の最後のトリをやった人が、『今日のはいかがでしたか?』と必ず訪ねてきた」(允氏)というから、かな

りのもの。栄耀氏の葬儀では、5代目柳家小さん師匠が口演している。

写真では、見るからにスマートフォンで、おしやれで、撮影慣れしている印象の栄耀氏。「自分の弟子にプロがいて、撮られる方(栄耀氏)もしっかりして



親子ともに受章した勲章。右が栄耀氏、左が允氏

たからね」と允氏は言う。口元のダンディなひげには、傷を隠す意図があったそうだ。「おやじはひげを取ると格好悪いからって剃らなかつた。本当のことは分からないよ。見たことないから(笑)」(允氏)。

今回の訪問で、濱出氏が特に聞きたかったのが、栄耀氏の血液型。允氏から「うちはみんなB型だよ。Bが強いんだ」と教えてもらうと、濱出氏は「やっぱりそうですか! いやあ、私もB型です。いろいろやりたがるものですから、きつと同じじゃないかと思っていました」と感激しきりだった。

年譜

1893(明治26)	石川栄耀氏誕生
1914(大正 3)	東京帝大進学 第1次世界大戦
1919(大正 8)	都市計画法公布
1920年代 (大正9-昭和4)	都市計画技師として名古屋へ 結婚、允氏誕生、欧米視察 関東大震災
1930年代 (昭和5-14)	東京に赴任 商業都市美協会を設立 2.26事件
1940年代前半 (昭和15-19)	防空都市計画の研究に着手 東京都へ 太平洋戦争 東京大空襲、敗戦
1940年代後半 (昭和20-24)	戦災復興計画立案 『私達の都市計画の話』発刊 目白文化協会を結成
1950年代前半 (昭和25-29)	日本都市計画学会が発足 早稲田大教授へ。全国で講演
1955(昭和30)	北陸出張中に倒れる、永眠(62歳)
1960年代 (昭和35-44)	所得倍増計画、全総 東京五輪、東海道新幹線
1970年代 (昭和45-54)	浅間山荘事件、沖縄返還 日本列島改造論、石油ショック
1980年代 (昭和55-平成1)	バブル景気 昭和の終わり、ベルリン壁崩壊
1990年代 (平成2-11)	バブル崩壊、阪神大震災 世界人口60億人超に
2000年代 (平成12-21)	9.11テロ、日本が人口減少へ 改正街づくり3法。都市縮小時代
2008(平成20)	『えいよう会』スタート
2010(平成22)	現在

文・構成/牧野洋久

写真/渡邊耕、牧野洋久

発行日/2010年12月21日

この冊子は、えいよう会ホームページからダウンロードできます。

<http://eiyoukai.la.coocan.jp/>

参考:『都市計画家石川栄耀 都市
文献・探求の奇跡』(鹿島出版会)

【編集後記】

都市に情熱を持ち、優秀な上に、お茶目で少々おっちょこちょい。そんな栄耀氏のお姿を目に浮かべました。「あなた方と会ったら、おやじは喜んでしょうね」というお言葉にも感激です。厚かましいお願いにもかかわらず、お時間をいただき、石川様、渡邊様、ありがとうございました。(牧)

『えいよう会』は、東京・渋谷を中心に活動しているグループです。栄耀氏が1948(昭和23)年に出版した中学生向け読本『私達の都市計画の話』(兼六館)をきっかけに、渋谷などでまちづくりに関わっている方々のつながりができたことから、栄耀氏のお名前を拝借させていただきました。

活動といっても、

『えいよう会』とは?

メインは「飲み会」で、毎月飲むという以外はルールのない、ゆるやかな集まりです。2年半以上が経ち、徐々に参加者の幅も広がりました。たまに旅行企画もやっています。栄耀氏が提唱していた「夜の都市計画」の実践として、盛り場をフィールドにのんびりと続けば良いなと思っています。

